女性教員懇話会　ニュースレター

2010 年度　第 2 号／2011 年度　第 1 号
（2011 年 10 月 5 日発行）

目次

ご挨拶　P.1
2010 年度報告　P.2
2011 年度新事務局　P.3
2010 年度研究会「リサーチ・ライフ・バランスをめぐって」報告　P.3
2011 年度研究会のお知らせ　P.10
事務局からのお知らせ＆女性教員懇話会について　P.11

♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬♬

【ご挨拶】2010 年度から 2011 年度へ

前年度の「松本総長と話そう！」が好評を得て、ぜひ今度はもう少し多くの方に参加していただける形で開催しようということになり、2010 年度初めからその準備にあたり、12 月に「リサーチ・ライフ・バランス」を考える研究会を開催しました。総長をお招きし、今度はオープンな会にして様々な若手研究者や学生の話をうかがう機会となりました。

今でも女性教員の割合は極めて少ない上に、分布が底辺の大きな三角形でありますが、キャンパスの女性研究者の現状は 10 年前と比較しても大きく変わっています。また、理系や文系、医学系などの専門分野のちがい、そして、ライフスタイルの多様化に伴う様々な立場の相違によって、女性教員といっても決してひとくくりにはできません。そうした現状をふまえての開催だったのですが、まさに、世代や立場が重層的になり、女性研究者の意見や視点は多様になっていることを痛感する会となりました。準備の上で配慮が足りないことばかりだったという反省とともに、でもそのように多様化しているからこそ、お互いの話をざっくばらんに聞きあう場はこれからも用意していくことが必要だとも身をもって感じました。

いろいろ学ぶことが多かったと同時に、毎月準備で集まる他部局から集まってこられる事務局の皆様との話合いはとても楽しく、啓発され、まさにこのような輪をキャンパスで少しでも広げられたらと願わずにはいられません。一年間、至らないことばかりでしたが、事務局メンバーの皆様、研究会に参加してくださったスピーカーはじめ出席者の皆様、アドバイスや様々な形で支えてくださる総長・関係理事・理事補及び女性研究者支援センターの皆様に、心より感謝申し上げます。

2010 年度代表　　速水　洋子　（東南アジア研究所）

昨年度から事務局メンバーに加えていただき、多様な専門の方々のお話をうかがう機会を得て、学ばせていただくことばかりだと日々感じております。それと同時に、懇話会メンバーの抱える諸問題がその範囲に限定されるものでないことを強調する必要性も感じます。私たちは、女性という点では職員の方々とも同じ問題に直面し、教員としてはとりわけ若手を中心とする任期付き教員を取り巻く深刻な状況に取り組まねばなりません。その延長上には大学院生も含めた研究者の地位の向上という課題もあります。「女性」「教員」懇話会があることによって、メンバー以外の方々との連帯が妨げられるのは避けなければなりません。他大学の状況にも、今後は注意を払って行きたいです。

こうした点にも留意しつつ、今年度は総長懇談を実現させる方向で活動したいと考えています。わからないことばかりでご迷惑をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いします。

2011 年度代表　　髙山　佳奈子　（法学研究科）

◉◎◉◎◉2010 年度報告（活動報告・会計報告）◉◎◉◎◉◎

活動報告

ニュースレターの発行（7 月 29 日）、総長を招いての研究会「リサーチ・ライフ・バランスをめぐって」（12 月 3 日）を行いました。今回、昨年度に引き続き、ニュースレターについては 2010 年度第 2 号と 2011 年度第 1 号の合併号として発行することになりました。

会計報告および会計監査報告

収入

前年度繰越金	174,272 円
会費納入	48,000 円
内訳	
47 名、昨年度分及び次年度以降分を含む	
寄付	7,950 円
登谷先生歓送会残額	
受取利子	66 円
合計	230,288 円

支出

振込書印字サービス代	900 円
宛名ラベル代	5,454 円
封筒代	3,310 円
切手代	840 円
研究会話者昼食代	3,000 円
小計	13,504 円
次年度繰越金	216,784 円
合計	230,288 円

女性教員懇話会の本年度事業の会計決算について、監査の結果、適正に執行されていると認め、報告いたします。

2011 年 4 月 2 日

会計監査　赤 松 美 紀　（印影省略）

●○●2011 年度新事務局●○●○●○●○●○●○●○●○●

事務局メールアドレス：female-jimgroup@sys.bot.kyoto-u.ac.jp
代　表　：　髙　山　佳　奈　子（法学研究所　内線 3221）
会　計　：　落　合　久　美　子（農学研究科　内線 6108）
書　記　：　船　曳　康　子　　（医学部附属病院　内線 19-3377）
研究会　：　松　下　佳　代　　（高等教育研究開発推進センター　内線 3085）
広　報　：　岩　崎　奈　緒　子（京大総合博物館　内線 3283）

女性教員懇話会第 61 回研究会

リサーチ・ライフ・バランスをめぐって

女性研究者にとってのリサーチ･ライフ･バランスと一言で言っても、分野や立場によって抱える問題は様々です。今回の研究会は、京都大学キャンパスの女性研究者が集まり、なるべく多様な立場から率直に話し合う場をつくること、また、大学側のこれまでの取り組みや現状を知り、それぞれの状況について相互理解を深めつつ、共通課題を模索することを目的として開催しました。大学院生、ポスドクから常勤の方まで、立場を問わず話し合える場を目指し、松本紘総長・塩田浩平理事の出席も得て研究会を行いました。概要をご報告します。

ご協力くださいました女性研究者支援センター、発言者の方々にお礼申し上げます。

日時：2010 年 12 月 3 日（金）
　　12 時～14 時

場所：文学部新館地下 1 階大会議室

主催：女性教員懇話会
協力：京都大学女性研究者支援センター

プログラム：

12:00～12:40	趣旨説明 パネル発表
12:40～12:50	松本紘総長のコメント
12:50～14:00	現状についての資料提供 および報告 ディスカッション

パネル参加者：
ファシリテーター：今田絵里香さん（文学研究科特定助教）
現状に関する資料紹介：速水洋子さん（東南アジア研究所、女性教員懇話会）

パネル発表：
中井郁代さん（理学研究科助教）
赤枝香奈子さん（文学研究科特定助教〔グローバル COE〕）
船曳康子さん（医学部附属病院助教）
末廣由夏さん（京都大学学生パパ・ママサークル☆めんどり学部、医学研究科修士課程 1 回生）
※ 肩書は当時

研究会当日は、異なる専門・地位からの発表を聞くことで、それぞれのニーズが多様であり、制度の柔軟化が求められていることが明らかになりました。また、世代による意識の相違があると感じられる場面もありましたが、その背景には、大学の定員と人件費とが削減され、男女問わず教職員の業務負担が過剰となり、とりわけ若手研究者の研究・勤務条件が悪化しているという構造的な問題があります。この研究会を契機に、大きな問題への建設的な取組みが少しでも進むことを希望します。　（髙山佳奈子 記）

1　趣旨説明

速水洋子（東南アジア研究所教授）

女性研究者が圧倒的なマイノリティーだった20年前からの歩みを振り返ると、先輩方の努力、大学の対応、社会の変化により、認識や制度・設備が向上しつつある。だが、相変わらず女性研究者の割合は低く、出産・育児などの家族形成期の女性が研究を続けていくのは並大抵のことではない。認知や多様性が一定程度整った中で、制度をいかに現実にそぐう形で活用するかを問い合うときが来ている。年齢や専攻により色々な立場があるので、忌憚なく意見を交換して現状認識を共有し合うことが始まりだと思う。今日は若手を中心に、最も問題を抱えている世代の声を多分野から聞く予定である。

この研究会は、今年3月にクローズドの会として行った「総長と話そう！」の経験をもとに、テーマを絞って問題意識を共有したらよいのではないかということで企画した。大学のこれまでの取組みや様々な分野の事情を知った上でこれからのことを考えるため、リラックスして話し合う機会を持とうというのが趣旨である。

2　パネル発表

今田：今回は、理系、文系、医歯薬系の若手研究者と、学びながら育児をしている方にパネリストとしてお話しいただく。

中井郁代（理学研究科助教）

助教4年目。2歳の男の子がおり、夫も研究者で職場が遠いので、普段は子どもと2人ですごし、困ったときは三重の実家の母親に助けてもらうが、毎日、時間的・体力的に大変。女性研究者支援センターの事業である待機乳児保育室や病児保育、出張の際のお迎え保育には助けていただき、感謝している。

小さい子を持つ実験系の研究者にとってのワーク・ライフ・バランスは、執筆・書類作成や資料調査などでは時間をやりくりしやすいが、実験は他のメンバーの予定や機械の調整、時間の確保、予想外の緊急事態への対応が非常に難しい。個人的な対応には限界がある。夜間保育も、緊急時のみに利用する制度がないので、大学との連携ができればかなり助かると思う。

研究にはやりがいがあるが、もともと大型の加速器を使い2、3週間の泊まり込みの実験もある分野が専門だったが、子どもを抱えたら継続が困難なため、実験室でできる研究室に専門を変えた。これからは女子学生が戦略的な視点で専門を選べるよう、アドバイスできる機会があればよいと思う。個人的な事情を考慮して進路を決めるべきかどうかも含め、一緒に考えていきたい。

赤枝香奈子（文学研究科助教）

大型研究プロジェクトの特定助教。社会学専攻で、文系では就職の難しい分野の1つ。かつて、研究科の助手は、何年か勤務すれば任期なしの職に就くことができていたが、近年はそうでなくなっている。教育・研究以外の用務をこなさなければならないことも多く、任期付きという地位も不安定である。

現在の女性研究者支援は、子どものいる、家庭のある女性の支援が主として念頭に置かれているようであり、不満を感じるところもある。未婚女性は支援が必要だと認識されていないように思われる。「リサーチ・ライフ・バランス」で言えば、「ライフ」のない存在と考えられているのではないか。同じ未婚でも、男性は将来、一家の大黒柱になる存在と考えられ、就職などでも優先

的に考慮されてきたのに対し、女性は一人前とはみなされず、さらにパートナーのいない女性はよりいっそう貧困に陥りやすい。「ライフ」は家庭生活だけでなく、私生活全般のこととして、既婚・未婚、男女を問わず支援すべきなのではないか。

船曳康子（医学研究科助教）

老年科出身の内科医だったが、大学院に戻り認知症スクリーニングの研究後、カリフォルニア工科大に留学し、発達・学習メカニズムを研究、子どもを 2 人産み育てた。帰国後、3 人目を出産し、2 年間精神科の公募型特任助手、その後 2 年間学振の特別研究員、それから探索医療臨床部の研究員を経て現職につき、子どものこころと発達の臨床および研究が専門。

医歯薬の分野には研究オンリーの方もいるが、まず臨床を経験しそれに基づいた研究をする場合が多いという特色がある。もちろん、臨床だけの方も多いが、研究者の会なので、今回は両方を行う立場から話させていただく。

学部生では理系の割には女性の多い分野だが、スタッフの女性は（増え始めたものの）少ない。キーワードは「多忙」。診療と同時に研究もする。妊娠、育児中の女性にとっては、日当直を始めとしてこの多忙さには困難が多い。周囲からの理解が救いとなるであろうが、周囲のスタッフからみると、自分たちも所詮多忙なので、多忙な女性のために自分の負担が増えるという不安が生じ、理解の余裕もなくなってしまうのではないか。当事者たる女性がそれを察知して、やる気があっても職を遠慮してしまうこともある。双方の納得できる体制が望ましいが、画一的な制度はおそらく困難。女性だから、育児中だから働きが悪いだろうという先入観を外し、ひとりひとりの能力、やる気、向き不向きを見る流れが広がってほしい。特に多忙な現場では、女性は働きが悪いかもしれない、という不安を軽減させることができれば、従来の枠組みの人にとっても、若手の女性研究者にとっても好循環になる。まずは現実にそれを発揮する場が必要なので、初期のチャンスはできるだけ多彩な視点から平等に配られてほしい。妊娠・育児は一定期間休めばすむという問題ではなく、育児等があっても何もできないわけではない。皆がしてきた「何か」ができないからだめ、という枠組みではなく、それを超える「できること」に目を向けてくれる人が増えればと望む。徐々にそのような流れになっており、流れを作って下さった先輩方には感謝している。女性に限らず、病弱な人、外国人、ハラスメント問題等のためにも、その広い視野が加速され、一層広がっていくことを待ち望んでいる。

末廣由夏（医学研究科修士課程）

子どもが中 1。出産後に看護の道を志し、子どもが 2 歳のとき看護学生になった。助産師になろうと思い、良い成績をとらないと進学できないので、子どもの面倒をみる時間を減らして勉強した。子どもの年長のときに医療短期大学部の専攻科に入学。助産の実習には夜間当直もあり、自分は全面的に親の助けを借りることができた。出産や介護の経験から生まれた熱意を持つ人に対するハードルが実習のために高くなるのを危惧する。卒業後 6 年間臨床を経験し、この春に医学研究科人間健康科学系専攻に入学した。現在は開業助産師。